

令和 5 年 10 月 23 日現在

機関番号：32657

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13474

研究課題名（和文）統語論と言語使用のインターフェースに関する日英語研究

研究課題名（英文）A Study of the Interface between Syntax and Language Use in Japanese and English

研究代表者

坂本 暁彦（Sakamoto, Akihiko）

東京電機大学・理工学部・助教

研究者番号：50757193

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生成統語論がこれまでに築き上げてきた形式的アプローチを採用したうえで、統語構造に関する諸原理が実際の言語使用においてどのように機能するのかについて、意味論や語用論の知見に基づき明らかにすることを目的とする。具体的には、英語や日本語における諸現象 - 修辞疑問文、ナント型感嘆文、権威の態度を示すことに特化した疑問文、「何なら」の典型用法・新用法、その他の関連現象 - の分析を通して、言語の形式や意味機能に関する普遍性と個別性の両方が説明可能な言語理論の構築を目指す。質的アプローチを基本とするが、理論仮説の妥当性を量的に検証するアプローチも採用して研究を推進していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生成統語論の枠組みでは、言語運用のような統語論の外側のレベルからの理論検証という形での研究はほとんど行われていない。そのため、当該枠組みにおいては、話し手・聞き手の相互やり取りの中に観察される言語使用の側面は捨象されることが多く、新たな言語現象の発掘にも乏しくなっている状況がある。本研究は、統語論の内と外両面からの言語理論構築を試みるところに独創性があり、理論内的な整合性を求めるだけでは得られない一般性がある。

研究成果の概要（英文）：Adopting formal approaches built up by generative syntax, this study aims at elucidating how syntactic principles function in actual language use, based on semantic and pragmatic findings. Our specific goal is to construct an explanatory linguistic theory that can capture both universal and language-specific properties of forms, meanings, and functions through the analysis of linguistic phenomena in English and Japanese: (i) rhetorical questions, (ii) nanto-type exclamatives, (iii) questions specialized in showing the speaker's authoritative attitude, (iv) typical and novel usages of nan-nara, and (v) other related phenomena. While this study essentially draws on qualitative approaches, it will also adopt quantitative approaches to examine the validity of our theoretical hypotheses.

研究分野：統語論

キーワード：統語論 言語使用 修辞疑問文 ナント型感嘆文 権威の態度を示すことに特化した疑問文 「何なら」の典型用法・新用法 主語省略現象 WH島現象

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

### (1)理論の妥当性検証の方法

一般に、統語現象の観察から導き出された抽象構造に関する理論の妥当性は、その他の統語現象の説明可能性や理論的な整合性から証明される。しかし、妥当性の検証には別の方法がある。Chomsky (1957)が論じるように、統語構造がいったん明示化されると、言語が実際に機能する際に、当該統語構造から派生される表示がどのように使用・理解されるのかについて研究することが可能となる。この種の研究において、統語論的に定式化された抽象構造の理論は、話し手・聞き手の相互やり取りに見られる言語使用の諸側面を捉えられるかどうかによって、その妥当性が検証されることになる。かくして、統語論の内側からだけでなく外側からもその妥当性が証明されたならば、その抽象構造に関する理論がより一般性の高いものであると結論づけることができる。

### (2)生成統語論と言語使用に関する研究

理論構築に際して言語使用のような統語外的な要因も取り込もうとするカートグラフィック流のアプローチ (Rizzi (1997 et seq.)) は、こうした研究の流れの中に位置づけることが可能だが、言語使用の諸原理を明らかにしようと取り組んできた意味論や語用論によって蓄積された知見が十分に活かされているとは言えないのが、国内外における生成文法を基盤とする研究の現状である。

## 2. 研究の目的

本研究は、生成統語論がこれまでに築き上げてきた形式的アプローチを採用したうえで、意味論や語用論の知見も考慮に入れつつ、統語構造に関する諸原理が実際の言語使用においてどのように機能するのかについて調査することで一般性のある言語理論の構築を試みる。

## 3. 研究の方法

具体的には、英語や日本語における諸現象 - 修辞疑問文、ナント型感嘆文、権威の態度を示すことに特化した疑問文、「何なら」の典型用法・新用法、その他の関連現象 - の分析を通して、言語の形式や意味機能に関する普遍性と個性が同時に説明可能な言語理論の構築を目指す。質的アプローチを基本とするが、理論仮説の妥当性を量的に検証するアプローチも採用して研究を推進していく。

## 4. 研究成果

### (1)修辞疑問文

修辞疑問文 (RQ) は、純粋疑問文 (GQ) の形式的・意味機能的特徴を利用した形で作り出される修辞用法である。GQ は一般に、相手から情報を引き出す質問として機能するが、RQ は相手の行為に対して非難の気持ちを表明するのに用いられる。日本語の個別研究および日英語の比較対照研究 (学術論文(1)~(7)) を通じて、疑問形成が、GQ であれ RQ であれ、CTSD (clausal typing and scope determination) という普遍的な統語的仕組みのもとに行われることが明らかとなった。意義のある成果を一つ挙げれば、この仕組みのもとでは、文末に生起する要素がマーカーとして RQ 解釈を保證する形の修辞疑問文 (例えば、「この」RQ や「ものか」RQ、「ことか」RQ) が、なぜ日本語で生産的で、かつ、英語で非生産的なのかということに対して合理的な説明を与えることが可能になった。

### (2)ナント型感嘆文

驚き感情の表出に特化した日本語表現の一つにナント型感嘆文がある。当該表現の名詞タイプ (例えば、「なんて味(なん)だ」) では、不変化詞「の」の生起が随意的となることが指摘されている。一連の研究 (学術論文(8)~(10)) では、五十嵐 (2015)による「の」の意外性分析に基づき、名詞タイプに「の」が生起する場合、話し手による意外性判断を伴った驚き感情が表出されるという仮説を立て、質と量の両面からその妥当性の検証を行ってきた。研究成果については、拡大修正のうえ、国内ジャーナルに投稿中である。

### (3)権威の態度を示すことに特化した疑問文

Am I understood? という疑問文は形式上、Do you understand (me)? の受動文に相当するが、純粋な clarification question としては機能しない。学術論文(11)では、小説や映画、ドラマ由来の事例を分析し、当該疑問文が「話し手が権威の態度を示し、特定の行為を行う、あるいは、行わないよう聞き手に強く仕向ける」という機能的特徴を持つことを示した。また、この機能的特徴が、受動化 (統語操作の一種) による主語の前景化によって派生されるものだということも論じた。

#### (4)「何なら」の典型用法・新用法

日本語の「何なら」には、「あなたが望むなら」のように解される、辞書にも意味・用法の記載がある典型用法と、辞書記述にはないが近年若者を中心に用いられるようになった、言わば「極端なことを言えば」のような意味を持つ新用法がある(新用法の詳細な記述については島田(2018)を参照)。一連の研究(学術論文(12)および(13))では、典型用法が Yes/No 疑問文のように二値(肯定値と否定値)を、新用法が Wh 疑問文のように多値(複数の肯定値)を想定する言語表現として特徴づけられることを示した。また、新用法は、極端な事態の断定をする際に用いられるが、当該用法が断定として機能する背後には、発話に先行して Wh 語に何らかの値を話者が想定するという、修辞疑問文の持つ特徴と並行的な文法上の仕組みが隠れているということについても論証した。

#### (5)その他の関連現象

学術論文(14)~(16)にて当該現象に関する研究成果を報告した。ここでは(14)について取り上げる。英語では、形式上、主語の生起が義務的である(\*Am here.)。しかし、会話ではこの原理が違反されうる(A: How do you like it? B:  $\phi$  Tastes good. A: Really? B: \* $\phi$  Tastes good. (cf. It tastes good.))。ここに統語論と言語使用の接点が認められる。話者 B は最初の発話で、主語のある無標形式では得られない特殊な意味効果(発話時における話し手の思考内容の曝け出し - 日本語のイ落ち形式「うまっ」が実現する意味効果に類似)を実現する(Ikarashi (2015))。この特殊な意味効果が CP 領域の欠落から派生されることを証明した。CP は聞き手への伝達性の保証に責任を持つ統語範疇であり(Tenny (2006)) CP 領域の欠落は当該表現の伝達性の欠落につながる。よって、CP が欠落した表現は、聞き手への伝達を意図しない話し手の思考内容の曝け出しという意味に特化する。当該現象における主語の欠落は、統語構造において CP 領域が欠落していることを指示する文法的な合図として機能すると言える。

### 5. 主な発表論文等

〔学術論文〕(計 16 件、研究代表者に下線)

#### 修辞疑問文

- (1) Sakamoto, Akihiko (2017) "Rhetorical Question Formation in Japanese and English," *Data Science in Collaboration* 1, pp.155-164. (査読有)
- (2) 坂本暁彦・高木幸子 (2018) 「日本語修辞疑問文における対格 WH 語の指示性 - 統語構造に基づく韻律構造の予測 - 」『電子情報通信学会技術研究報告』117(509), pp.101-105. (査読無)
- (3) 高木幸子・坂本暁彦 (2018) 「日本語修辞疑問文における対格 WH 語の指示性 - 音声聴取実験による二種類の統語構造の検証 - 」『電子情報通信学会技術研究報告』118(49), pp.83-88. (査読無)
- (4) 坂本暁彦 (2018) 「日英語 WH 現象の理論化と意味解釈の有標性について」『日本英文学会東北支部第 72 回大会 Proceedings』 pp.155-156. (査読無)
- (5) Sakamoto, Akihiko (2018) "Rhetorical Questions: Structural Unmarkedness in English and Japanese," *Tsukuba English Studies* 37, pp.1-20. (査読有)
- (6) 高木幸子・坂本暁彦 (2019) 「韻律と視線が指示性解釈に及ぼす影響 - 対格 WH 語を伴う日本語修辞疑問文を用いた検討 - 」『電子情報通信学会技術研究報告』119(38), pp.81-86. (査読無)
- (7) 五十嵐啓太・坂本暁彦 (2019) 「修辞疑問文に現れる I ask you が認可される仕組みについて」『英語語法文法研究』26, pp.92-108. (査読有)

#### ナント型感嘆文

- (8) 高木幸子・坂本暁彦 (2019) 「意外性に関わる言語形式と心理学における感情研究」『日本英文学会東北支部第 73 回大会 Proceedings』. (査読無)
- (9) 坂本暁彦・高木幸子 (2020) 「ナント型感嘆文 - 不変化詞「の」の生起に関する質的・量的検証」『電子情報通信学会技術研究報告』120(16), pp.25-30. (査読無)
- (10) 坂本暁彦・高木幸子 (2023) 「ナント型感嘆文 - 不変化詞「の」の有無が快度評価に与える影響」『電子情報通信学会技術研究報告』122(349), pp.102-107. (査読無)

#### 権威の態度を示すことに特化した疑問文

- (11) Sakamoto, Akihiko and Kevin M. McManus (2022) "Am I Understood?: Passivization and Foregrounding," *English Linguistics* 38(2), pp.263-275. (査読有)

#### 「何なら」の典型用法・新用法

- (12) 坂本暁彦 (2021) 「二値と多値を想定する言語表現 - 「何なら」の典型用法と新用法の記述的考察 - 」『電子情報通信学会技術研究報告』120(432), pp.103-108. (査読無)
- (13) Sakamoto, Akihiko (2022) "A Note on the Grammatical Status of Nani: The Marked Use of the Unmarked Wh-Phrase in Japanese," *Tsukuba English Studies* 40, pp.27-40. (査読有)

### その他の関連現象

- (14) Sakamoto, Akihiko and Keita Ikarashi (2017) “Subjectless Sentences in Conversation and the Defectiveness of Their Syntactic Structures,” *Studies on Syntactic Cartography*, pp.336-351. ( 査読有 )
- (15) Sakamoto, Akihiko (2017) “Wh-Island Effects in Japanese and English,” *Tsukuba English Studies* 36, pp.47-71. ( 査読有 )
- (16) 檜山貴義・坂本暁彦・高木幸子 (2019) 「スマートスピーカーによるフィラーとポーズを伴う返答に対するアニマシー知覚」『電子情報通信学会技術研究報告』118(487), pp.87-92. ( 査読無 )

〔学会発表〕(計 11 件)

### 6 . 研究組織

#### (1)研究代表者

坂本 暁彦 ( Sakamoto, Akihiko )  
東京電機大学・理工学部・准教授  
研究者番号：50757193

#### (2)研究協力者

高木 幸子 ( Takagi, Sachiko )  
常磐大学・人間科学部・教授  
五十嵐 啓太 ( Ikarashi, Keita )  
長岡技術科学大学・工学部・講師

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Akihiko Sakamoto	4. 巻 40
2. 論文標題 A Note on the Grammatical Status of Nani: The Marked Use of the Unmarked Wh-Phrase in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akihiko Sakamoto and Kevin M. McManus	4. 巻 38(2)
2. 論文標題 Am I Understood?: Passivization and Foregrounding	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 263-275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本暁彦・高木幸子	4. 巻 120(16)
2. 論文標題 ナント型感嘆文 - 不変化詞「の」の生起に関する質的・量的検証 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本暁彦	4. 巻 120(432)
2. 論文標題 二値と多値を想定する言語表現 - 「何なら」の典型用法と新用法の記述的考察 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木幸子・坂本暁彦	4. 巻 119(38)
2. 論文標題 韻律と視線が指示性解釈に及ぼす影響 - 対格WH語を伴う日本語修辭疑問文を用いた検討 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木幸子・坂本暁彦	4. 巻 巻号無
2. 論文標題 意外性に関わる言語形式と心理学における感情研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本英文学会東北支部第73回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 ウェブ上での公開のため頁数無
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐啓太・坂本暁彦	4. 巻 26
2. 論文標題 修辭疑問文に現れるI ask youが認可される仕組みについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語語法文法研究	6. 最初と最後の頁 92-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木幸子・坂本暁彦	4. 巻 118(49)
2. 論文標題 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性 - 音声聴取実験による二種類の統語構造の検証 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本暁彦	4. 巻 巻号無
2. 論文標題 日英語Wh現象の理論化と意味解釈の有標性について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本英文学会東北支部第72回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 155-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akihiko Sakamoto	4. 巻 37
2. 論文標題 Rhetorical Questions: Structural Unmarkedness in English and Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 檜山貴義・坂本暁彦・高木幸子	4. 巻 118(487)
2. 論文標題 スマートスピーカーによるフィラーとポーズを伴う返答に対するアニマシー知覚	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 87-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akihiko Sakamoto	4. 巻 36
2. 論文標題 Wh-Island Effects in Japanese and English	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 47-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akihiko Sakamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Rhetorical Question Formation in Japanese and English	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Data Science in Collaboration	6. 最初と最後の頁 155-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本暁彦・高木幸子	4. 巻 117(509)
2. 論文標題 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性 統語構造に基づく韻律構造の予測	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 101-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 坂本暁彦・高木幸子
2. 発表標題 ナント型感嘆文 - 不変化詞「の」の生起に関する質的・量的検証 -
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 2020年5月研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂本暁彦
2. 発表標題 二値と多値を想定する言語表現 - 「何なら」の典型用法と新用法の記述的考察 -
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 2021年3月研究会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 高木幸子・坂本暁彦
2. 発表標題 韻律と視線が指示性解釈に及ぼす影響 - 対格WH語を伴う日本語修辭疑問文を用いた検討 -
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 2019年5月研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木幸子・坂本暁彦
2. 発表標題 韻律と視線が非難の焦点の解釈に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木幸子・坂本暁彦
2. 発表標題 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性 - 音声聴取実験による二種類の統語構造の検証 -
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 2018年5月研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木幸子・坂本暁彦
2. 発表標題 アクセント位置が非難解釈に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木幸子・坂本暁彦
2. 発表標題 意外性に関わる言語形式と心理学における感情研究
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 檀山貴義・坂本暁彦・高木幸子
2. 発表標題 スマートスピーカーによるフィラーとポーズを伴う返答に対するアニマシー知覚
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 2019年3月研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akihiko Sakamoto
2. 発表標題 Rhetorical Question Formation in Japanese and English
3. 学会等名 The International Conference on Industry-Academia Collaboration among Pure, Applied, and Commercialization Researches Based on Linguistic Data, Tsukuba Global Science Week (TGSW2017) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂本暁彦
2. 発表標題 日英語WH現象の理論化と意味解釈の有標性について
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第72回大会シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂本暁彦・高木幸子
2. 発表標題 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性 統語構造に基づく韻律構造の予測
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 2018年3月研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Akihiko Sakamoto and Keita Ikarashi	4. 発行年 2017年
2. 出版社 China Social Sciences Press	5. 総ページ数 446
3. 書名 Subjectless Sentences in Conversation and the Defectiveness of Their Syntactic Structures. In Si Fuzhen (Ed.), Studies on Syntactic Cartography (pp.336-351).	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高木 幸子  (Takagi Sachiko)		
研究協力者	五十嵐 啓太  (Ikarashi Keita)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------